

パキスタン

4年 大澤・遠藤(幸) 3年 岡戸・水沼

<目的>

- ・ 核情報の漏洩はいかなる場合においても避ける。
- ・ 中国と友好関係を保つ
→裏での核技術の支援を続けてもらう
- ・ 表上、米・アフガニスタンとの対テロ対策に協力姿勢を保つ
→米より中国とも関係強化を視野に行動
- ・ パキスタンの自立を少しでもはかると共に、共生への道をはかる

<交渉内容>

① 事前交渉

パキスタン・米国

(表面上ではあるが) 良好関係を保っていくよう対談
テロ一掃の為、協力姿勢を示すことを伝える

② 当日交渉

パキスタン・ロシア (序盤)

- 1、パキスタンに対し、テロ対策強化の為に軍派兵を希望の姿勢を示された。
- 2、派兵協力と共に、核管理をロシア側が受け入れることを要請
→対応
原子力協定を結ぶことで、派兵協力を受け入れる
- 1、協力関係に感謝する一方、裏の考えとしては、ロシアの威力をパキスタン内に拡大されないよう警戒姿勢を示す。
- 2、核管理は、核情報の漏洩につながる為、拒否の姿勢を示す。
原子力協定の受け入れは許可した。(中国と原子力協定を結んでいるが、万が一中国との関係が悪化したときに備え、ロシアとも協定を結んだ)

【裏交渉】…米・アフガニスタン・パキスタン (中盤)

ロシアとも関係を持つことを断固拒否していたアフガニスタンの強い要望により、さらなる米・アフガニスタン・パキスタンとの3カ国の繋がり強化を図りたい。

【裏交渉】…米・パキスタン (中盤)

パキスタン内で起きた反米デモに対し、アメリカから軍は派兵するが、表向きとしては、あくまでもパキスタン政府によって反米デモを鎮めてほしい

→対応 協力姿勢を示す

【裏交渉】…中国・パキスタン

両国共にあくまでも仲良く、協力関係は崩したくないという姿勢。

パキスタンが攻められた場合は助けてほしい、と要請を希望

<結果>

- ・ 核情報の漏洩は完全に防ぐことができ、自国の強みを守り通した。
- ・ パキスタンは、大国に板挟み状態にされた（中・米・ロシア・インド）
- ・ 途中、パキスタンは、自立を図ろうと米や大国に軍縮を試みたが中途半端に終わってしまった。
- ・ ロシアからの派兵受け入れの許可を示す代わりに、原子力協定を結ぶことで、核、原子力の安定的協力を結ぶことに成功。中国との関係悪化時にも備えることができた。

アメリカ

4年 辰野・藤井 3年 野口・原田

<目的>

1. 世界的核軍縮・対テロでリーダーシップをとり、国際協調を目指す
2. 他の大国進出の防波堤として中東地域への駐屯を続け、中東におけるアメリカの影響力を維持させ、国際社会のパワーバランスのコントロールをする

<交渉内容>

① 事前交渉

アメリカ・日本

軍縮に関する主要国会談を行うので出席、資金協力を求める。日本同意。
日米の協力関係を確認。

アメリカ・ロシア

軍縮に関する主要国会談を行うので出席を求める。ロシア同意。

アメリカ・パキスタン

協力関係を確認。パキスタンは自国の核問題について言及せず。

② 当日交渉

アメリカ→パキスタン

目的：ロシアのパキスタンに対する軍事援助を認め、中東におけるアメリカの負担を減らす。

結果：アメリカ、ロシアの軍事援助に同意。ロシアの軍事援助に対し、アメリカとパキスタンの友好関係を確認。

アメリカ→ロシア

目的：中東地域におけるテロについて、ロシアと対テロにおいての協力関係を確認。

結果：協力関係を確認。

アフガニスタン→アメリカ、パキスタン

ロシアがこれ以上介入してこないように、3カ国間の結束を確認。

日本→アメリカ

イランから日本に、経済制裁の解除を要求、日本を通してアメリカにも経済制裁の解除を要求。日本・アメリカ共に、イランがウラン工場への査察団を受け入れ、核がないことを証明しなければ解除しない意向で同意する。

アメリカ→ロシア、中国、日本（主要国会談）

目的：イランの地下核実験の表明を受け、各国でイランに対し経済制裁を行うこと、軍拡の流れに歯止めをかけるため、主要国で軍縮の意向を確認すること。

結果：中国が各国の制裁に対して反対の意を表明。

ロシア→アメリカ、中国、日本、イラン

主要国会談に引き続き、イランを招いて交渉。

イランの核をどう対処するか。ロシアに委ねさせるか否か…。

イラン→アメリカ

イランからアメリカへ、制裁をしないよう要請される。

イラン側から他国と相当以上にアメリカと協力したい意向示される。

アメリカから核を中国ではなくロシアに譲渡するよう呼び掛ける。

→結果、イランは自国で保持することを表明

<結果>

1について

パキスタンで軍事政権が誕生した時点で、インドに始まる一時的な軍拡は避けられないとの前提のもと進んだシミュレーションであった。最終的にイランが核の地下実験をおこなってしまったが、アメリカとしては主要四カ国の会談を主催し、アメリカを先頭として世界を軍縮に向わせるという目的があった。四カ国会談では主にイランの制裁について話が進んだが、各国が軍縮の意思があることを確認し、国際社会に表明することができた。また、特に潜在的敵対関係にあるロシアと協調することで、軍縮についてさらに強固な協力体制を築いていくことを確信した。つまり、アメリカとしては中国の台頭が一番望ましくないため、ロシアと手を結んだことで、大国中国の動きを牽制することができたということである。

2について

基本的には、既にアフガニスタンでのアメリカの地位は揺るぎのないものである。そこに一時的にロシアが駐留したとしても、パキスタン及び中東地域のアメリカの霸権は揺るがない。逆に一時的にロシアが駐留するということは、ロシアの軍事費がテロ対策などの中東の安定に使われるということなので、アメリカの負担が軽減することとなり、都合がよい（実際にアメリカはロシアや中国に対テロ戦争への協力を求めていた）。また、アフガニスタンに加え、パキスタンとも密につながり、対テロを通して三国間の関係がより強固なものになったため、中東において他の国が勢力を拡大するのは考え難い。結果としてアメリカが中東での勢力を維持することに加え、パキスタンとも結びつきが強くなったため、この目的は達成されている。

総括として

今回のシミュレーションで、アメリカがパキスタンに要求したことの一つに「核情報の公開」があった。建前としてはもちろん公開されることが望ましいが、本音としてパキスタンが情報を公開するとパキスタンの国としての存在があやうくなるため、公開はほぼ望めず、アメリカとしてもあくまでパキスタンには国としてあってもらいたい。しかしアメリカは核縮小を大きく掲げているため、パキスタンにイランのような地下核実験などの動きをされては困るのだ。そのため、パキスタンには~~厳しく追及はするが、あくまで制裁などの強固な措置はとらない~~との前提があった。その代わりとしてイランに対しては制裁などの強硬な姿勢をとり、間接的にパキスタンへ圧力を与えるという戦略をとった。今までの各国とのバランスを保ち、アメリカが大きな動きをとらないことで、実質中国の動きも制限できた（中国は動く準備はしていたようだが、実際動けなかった）。

つまり、全体を通して、アメリカは現状維持が目的でもあったため、アメリカとしての見解はこのシミュレーションは悪い結果ではなかったということである。

アフガニスタン

4年 池田・佐藤 3年 石川・小林

＜目的＞

『他国から資金や技術をもらい自国を発展させる』

→各国からの資金はインフラ整備などを行うため

日本から電力のための原子力の技術をもらう

エネルギーに関してイラン・中国と関係強化

インドから引き続き食料支援をしてもらう

＜交渉内容＞

① 事前交渉

アメリカ・パキスタン・アフガニスタン

テロ対策のために前提として関係継続。

※交渉はしていないが、シミュレーションの以前から三国関係は成立しているという前提。

イラン・アフガニスタン

イランに中国との3国関係のエネルギー協定を結ぶことを提案。

② 当日交渉

イラン・中国・アフガニスタン

シミュレーション始まる前提として、中国は、アフガニスタンの探鉱・開発権益を取得したことによって、アフガニスタン政府に35億ドルの投資を行う契約を結んでいた。そのためイランと共に中国に交渉をし、イラン・中国・アフガニスタンでエネルギー協定を結ぶことによって関係を築く。中国にイラン、アフガニスタンのエネルギーを優先的に供給することによって中国からの投資増大を求める。

→交渉成立

ロシア・アフガニスタン

ロシアから派兵したいとの要請。しかし、アフガニスタンはこれを拒否。

現在続いている軍事支援のストップをちらつかせられるが、断固ロシアの派兵を拒否。

↓これをうけて、

アフガニスタン・パキスタン・アメリカ

ロシアが軍事支援のストップをちらつかせてきたので、アフガニスタン・パキスタン・アメリカの3国がさらに関係を強化することを要望。軍事的な支援の継続を要請。

<結果>

ロシア以外の国からさらなる支援を受け取ることに成功。目標達成。

- ・日本

パキスタンにNPT批准と核情報の開示を積極的に求めることを条件に日本からさらなる経済支援と電力のための平和的原子力の技術を求めて、了承される。

- ・インド

パキスタンにNPT批准と核情報の開示を積極的に求めることを条件に経済支援と食料支援を求めて了承される。

- ・アメリカ

ロシアとの交渉を決裂することで関係強化。アフガニスタンでテロの発生時、軍事的・経済的支援を要請し、承認される。

アフガニスタンにおいて反米デモ・モスクワで未遂テロが起きた際、アメリカに増兵を求めたところ了承される。国内の対策としては、タリバン政府の卑劣な行為を宣伝することによって反米デモを収まらせ、北部同盟が再結成し、アメリカと共にタリバンを倒していく姿勢をとると発表。

- ・パキスタン

アメリカ・パキスタン・アフガニスタンの3国関係を強化することによって今までと同じ支援を継続していく。

- ・イラン

エネルギー協定を結んだことによってエネルギー源を確保。

- ・中国

エネルギー協定を結ぶことによってさらなる経済支援を受けることに成功

- ・ロシア

ロシアからFATA地域に派兵するという要請があったが、アメリカとパキスタン、アフガニスタンで対策を行っているので要請を拒否。しかし、軍事的支援は継続されたので、結果的に関係が悪化することはなかった。

ロシア

4年 遠藤(百)・村山 3年 中山・山本(真)

<目的>

アメリカに対し協調政策をとりつつ、アメリカの中東地域における一極支配を防ぐため、ロシアも中東地域に積極的に介入していく。パキスタンやアフガニスタンに影響力を持つ。

＜交渉内容＞

① 事前交渉

ロシア・インド

インドはパキスタンの軍事政権を承認すること。

インドとロシアはともに対テロで合意。

インドは対米的には現状維持。第1目的はアメリカとの関係ではない。

⇒インド・ロシア間で方針が合致したため協力関係を約束。

ロシア・アメリカ

アメリカは、日・中・露の先進国に対し、軍縮を目指した節度ある支援を要請し、ロシアは合意。

② 当日交渉

イラン・中国・ロシア

ロシアがイランの原子力発電所からなる核燃料を管理・監視することに合意。

アメリカからのドル支援が停止した場合、中国の人民元による支援を約束。

ロシア・パキスタン

民生用原子力協定を結ぶ。ロシアはロシア軍のパキスタン駐留承認を要請し、パキスタンはそれを受諾。

インド・ロシア

インド・ロシア間の協力関係を再確認。

ロシアは、インドへパキスタン・アフガニスタン地域への介入の協力を約束。

ロシア・アフガニスタン

ロシアはさらなる経済支援と交換にアフガニスタンへのロシア軍駐留の承認を要請。アフガニスタンによって断られる。

米・中・日・露

イランが核兵器を持ったことを受け、アメリカから3カ国での制裁を下すことを要請。中国は、まずは話し合いをするべきと提案。イランも交えて会談をもつことに合意。

露・米・中・日・イラン

中国から、イランへ、核兵器をロシアかあるいは他の先進国へ譲渡するよう説得。イランは中国へ核兵器の管理を依頼。中国はロシアへ譲渡するよう促す。

＜結果＞

アメリカの影響下にあったパキスタンにロシア軍を駐留させることができ、パキスタンへの影響力を持つことができた。

しかし、アフガニスタンへも影響力を伸ばそうと試みたものの、深く介入できなかった。

インド

4年 植村・山下 3年 徳屋・石井

＜目的＞・パキスタンに飲み込まれない。（「パキスタンへの対抗」を優先事項とする）

⇒パキスタンに対し、優位な立場に立つ。

・新政権を倒すまではせどとも、アメリカに承認させないようにさせる。（パキスタンに対しては厳しい態度で臨む姿勢を維持する）

各国との関係性

- ・ アメリカ：協調関係維持。（パキスタンが中国と結びつくことが考えられるため）
- ・ ロシア：特に軍事面において、協調関係維持。※イスラム原理主義運動排除、という共通目標の下、対タリバン政策を打ち立てる。（パキスタンなど他国と密接な関係を築く前に、できるだけ早い段階で手を組む。）
→共同声明でも出せれば GOOD
- ・ 中国：出方次第。（経済面では友好的だが、核問題では未だにゴタついているため）
- ・ イラン：エネルギー面のパイプライン外交だけは確保。（中国との結びつきが強い国）
- ・ アフガニスタン：経済支援体制の維持。国境問題の解決。
- ・ パキスタン：テロへの厳格な態度とはいっているが、実状としてのタリバンに対する態度を問う。対タリバン政策を詳しく国際社会へ提示するよう、強く求める。
- ・ 日本：伝統的友好国である関係を維持。

＜交渉内容＞

①事前交渉

ロシア・インド

内容：互いの親密な関係性の確認。パキスタンの新政権を承認はするが、テロに対する厳格な態度を求めるという共通の姿勢をとる。

イラン・インド

内容：パイプライン外交による互いの利益の確認。

中国・インド

内容：最終的には印中露三カ国で手を組み、アジアでの力を拡大することの提案。

結果：承認。

②当日交渉

ロシア・インド

内容：ロシアに関してはイスラム原理主義制圧という共通目標を掲げているので、ロシアがパキスタンと手を組む前に何らかの交渉をし、裏で手を組みたいと考えた。ロシアにとってインドは武器輸出第一位の国であるため、2カ国で手を組むことによってロシアの経済発展、インドの軍事力強化を期待。更にロシアを介してアフガニスタンとの関係強化を図る。

結果：成立

ロシアとの協力関係を築く。しかし、アフガニスタンはアメリカの属国となることを示唆し、ロシアを介しての関係強化は失敗。

イラン・インド

内容：パイプライン外交の強化

重要な燃料輸入国であるイランはインドにとっても重要と考え、イランが敵対国と手を組み燃料確保が困難になることを阻止するため、今後も関係を強化していきたいと交渉。

結果：成立

ロシア・中国・インド

内容：印中露三国共同声明

- ・表向きの目標＝アジアの安定を図る為、経済成長を遂げているアジアの主要国3国で、アジア全体の更なる経済成長を目指し結束していく。
- ・実際の目標＝印中露共通の懸念である、“アジアにおけるアメリカの一極化”を阻止する為に協力すること。

結果：成立

＜結果＞

- ・ロシアとの強固な協調関係を築けた（パキスタンに対抗する軍事力の確保は出来た）
- ・アメリカとの関係をもう少し強化して、パキスタン・アフガニスタン・アメリカ3カ国の中により介入していきたかった

イラン・イスラム共和国

4年 赤羽・高野 3年 林・富田

＜目的＞

中東地域における権力保持

＜交渉内容＞

イラン・アフガニスタン

内容：エネルギー協定。相互の資源交換。

結果：協定を結んだ。

イラン・中国・アフガニスタン

内容：イラン・アフガニスタンのエネルギーを優先的に中国に譲る。

友好的な関係を築く。

結果：協定を結んだ。

イラン・中国・ロシア

内容：中国→アメリカの経済制裁がドル停止を伴った場合、中国とイランとの貿易は人民元で取引することを提案、協力関係を強化することを確認

ロシア→引き続き、原子力の管理で協力関係を持続させていくことを確認

結果：協力関係の確認

イラン・日本

内容：イランに対する経済制裁の解除・アメリカにイランに対する制裁の解除を促す事を要求。

イランにIAEAの査察を入れ、核実験の事実が無ければ日本は承諾。

結果：イランが核実験を行っていたため、交渉は決裂。

＜結果＞

- ・核を保持。
- ・アメリカ、ロシア、中国、日本ら各国はロシアに核技術を委託することを求めるが、イランはこれを拒否。中国を除く、アメリカ、ロシア、日本から経済制裁を受ける。
- ・中国との友好関係の保持。

反省

・核を保持した時点でアメリカとの交渉を上手くやるべきだった。平和条約などを結び良好的な関係を築き、イランの国の立場を固められれば良かったのではないかと思う。

中国

4年 渋谷・大綱 3年 作田・須藤

＜目標＞

- 1、**中央アジアでの霸権強化**：中国東部は日本・韓国とアメリカの抑止が働いていることから、中国西部にまでその力が及ぶ事を避けたい。アメリカとのパワー対立が予測される。
- 2、**自国の安全保障**：中国から見て敵（インド）の敵であるパキスタンとの友好関係を維持。パキスタンに核開発技術を提供し、核保有国にする事で、対立するインドとの勢力バランスを取ろうとする。
- 3、**自国の経済発展**：中央アジアの資源開発に積極的。

＜交渉内容＞

イラン・中国・ロシア

【イラン、中国、ロシアの各国間の関係の確認→確認成立】

- ・中国、ロシアそれぞれの国がイランをサポートしていくことの確認。中国はイランに経済支援を行い、また、イランは中国へ資源を輸出することを約束する。

アフガニスタン・イラン→中国

【アフガニスタン、イランから、中国への交渉→ 交渉成立】

- ・アフガニスタンから中国へ、エネルギー資源輸出における第一優先権の約束を条件として、中国に経済支援を求めるとの交渉。イランとは引き続きお互いの強い協力関係も確認。

中国・パキスタン

【中国・パキスタンの二国間。→ 交渉成立】

- ・中国から核技術提供を続けるから、パキスタンの核保有情報は非公開にしてほしい
- ・一方パキスタンは中国に対し、インドと手を組まないよう要求する。
- ・パキスタンに対し、アメリカ・ロシア軍を撤退させる気があることを確認する。
- ・原子力協定締結

中国・インド・ロシア

【中国・インド・ロシア三国でのアジア経済協定。→ 交渉成立】

- ・アジアの経済発展を表向きの理由に、アメリカのアジア圏台頭を抑える目的。

中国・インド・ロシア

【同上】

- ・内容と共同宣言をする意思の確認

→中国はパキスタンの「インドとは手を組まないで欲しい」という要求を破る。

しかし、あくまでインドとは経済的な関係であるということをパキスタンに主張し、信頼関係を崩さないよう心がけた。

中国・パキスタン

【中国・パキスタンとの協議】

- ・中国はパキスタンに中国とインドは経済的協力のみ行うことを説明。

またパキスタンに対し、ロシア、アメリカの軍隊をパキスタンから撤退させることを強く勧める。

⇒パキスタンの動きは特になかった。

中国・日本・アメリカ・ロシア

【中国・日本・アメリカ・ロシアの四カ国協議。→ 話し合いがつかず】

- ・イランが核開発を進めている事が明らかになり、国際社会でもイランに対する制裁や、核軍縮面で協力を仰ぎたいというアメリカからの提案。

→中国は日本、アメリカ、ロシアとは異なりイランとは長い間信頼関係を築いていたため、経済制裁を行うのではなく話し合いで平和的な解決方法を主張した。

中国・日本・アメリカ・ロシア・イラン

【中国・日本・アメリカ・ロシア・イランの五カ国協議。→ 話し合いがつかず】

- ・イランの核をどの国が保管するか。

また、日本・アメリカ・ロシアは核軍縮協定に協力しない国（中国）に核を預けるのならばイランに経済制裁を行うことを主張した。

→イランは中国を希望、中国はロシアを勧める、ロシア・日本・アメリカはロシアを主張した。

<結果>

中央アジアでの霸権を強化するには至れなかった。アメリカやロシアをパキスタンから撤退させる事が最後まで出来なかった（パキスタンとロシア間の秘密交渉も大きな要因であるが）。

しかしアメリカが完全に中央アジアで霸権を強化する結果とならなかった事に関して言えば、幸いと言える。

パキスタンとの友好関係を保てた事と、資源を豊かに保有しているイランと協定を結べた事は中国にとってとても好ましい結果だった。

だが、中国が必死にロシアをパキスタンから追い出そうと、パキスタンに対して譲歩や優遇をしていたにも関わらず、実はロシアと手を結んでいた事実は中国には衝撃だった。これはパキスタンを完全に信用しきっていた足元を掬われ、反省すべき点だと思った。経済援助をしているという立場から中国はもっと強気に出るべきだったと考えられる。また、最後の方に行われた「核軍縮協定」の際に中国は他国とは異なる意見を出したため、孤立してしまった。このことは、中国を他の大国对中国という図にもなる可能性があたため、結果として他の大国と同じ意見になるのならば、そのことを想定し、初めから周りと協調し敵を作らないということも大切であると感じた。

日本

4年 石井・米田 3年山本(千)・飯島

<目的>

各国と友好関係を結び、日本を中心にアジアの安定をはかる。

<交渉内容>

◎裏交渉

日本・イラン

イランより、核に関しては、あくまでも平和的利用であるので、制裁を解いてほしいと要請される。また、アメリカにも経済制裁をゆるめてほしいので、日本からアメリカにそのように伝えてほしいとも要請される。もしそれができないのであれば、現在日本は我が国の貿易相手国第1位であるが、石油の輸出を一切止めると言われる。

日本からは、核情報の透明化、それを示す根拠がなければ制裁をやめられないという態度を示す。また、アメリカへのアプローチもあるので、現段階での返事はできないと伝える。

日本・アメリカ

先ほどのイランからの交渉内容を話した上で、IAEAの管理の下、IAEAのイランへの現地調査をイランが承諾し、さらに核の平和的利用が認められれば経済制裁をゆるめるということで交渉したいのだが良いかと相談を持ちかける。→アメリカの承諾を得る。

日本・イラン

アメリカとの交渉内容を伝える。イランが IAEA の現地調査承認。交渉成立。

→アフガニスタンのタリバン政策の表明に対し、同調する意向に、日本は補給の面などの支援を行う意を表明。

主要国会議（アメリカ・中国・ロシア・日本）

アメリカから、イランの地下核実験を受けて、各国に経済制裁を要求される。さらに、世界の流れが軍拡に向かっているため、世界的な軍縮の協力を求められる。日本とロシアは経済制裁の強化、軍縮への協力を決定する。中国は、イランとは伝統的な友好国のために、いきなり経済制裁にはふみきれない。一度中国とイランで話してから決定を出したいと主張。

主要国会議2（アメリカ・中国・ロシア・日本・イラン）

イランに対して、アメリカ、ロシア、日本の経済制裁を伝える。核を監視していたロシアに委ねるということであれば、経済制裁を解く。

→イランから、ロシアではなく中国に核を管理していただきたいとの発言。

→日本からイランに対して更なる経済制裁を発表。そしてアメリカとロシアとともに核軍縮に協力する意向を表明。

→その後、イランから核をロシアに委ねたいと要請がある。それに対してロシアが了承する。この動きを受けて、日本はイランに対する経済制裁を解くことを決定する。

＜結果＞

どの国とも関係が悪化しなかったことに関しては目的を達成したと考える。しかし、アジアの中心になって安定をはかることはできなかった。

イランの核問題をはっきりさせた点では、国際社会に対して、被爆国としての責任を果たせたと考える。しかし、パキスタンの核情報の透明化が図れなかった。

日本はアメリカの核の傘に守られているため、常にアメリカの動向のチェックをしていたが、それだけでなくアジアの一員として積極的にこの地域に介入していくことが必要であったと考える。